

1. 京都の正方形街区

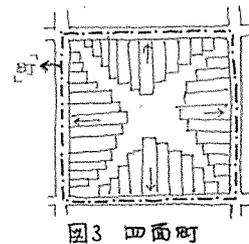
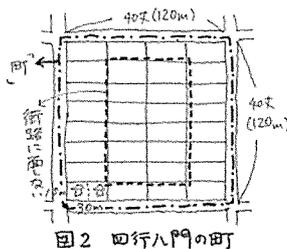
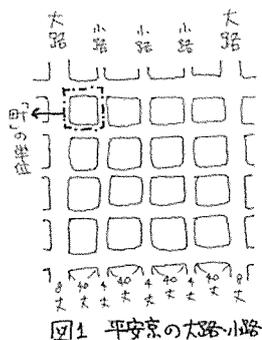
京都が「碁盤の目の町」と呼ばれるのは、古代平安京の外郭そのものが長方形であったことと、内部の個々の街区が正方形をなしていたことによる。日本では、外郭が四角い都市は少ないが、正方形街区を持つ都市ならいたるところにある。近世城下町に由来する都市のほとんどがそうであり、明治以後に建設された横浜や札幌のような新興都市でも、京都に類似した正方形街区が採用されている。平安京は古代都市の最終型として中世に継承され、その後の都市計画に絶大な影響を与えたのである。

そもそも平安京の正方形街区は、古代の単位で1丈=10尺(1尺=約0.3m)として、一辺40丈(120m)であった。街区と街区の間は幅4丈(12m)の「小路」で区切られ、そのうち4本に1本は幅8丈(24m)の「大路」とされていた。たとえば三条大路(現在の三条通)から四条大路(四条通)の間には4街区+3小路を挟むので、大路中心間で180丈(540m)の距離になる【図1】。

一街区は「四行八門」と呼ばれるように、南北に8分割、東西に4分割され、 $15m \times 30m = 450m^2$ の長方形が2戸分の宅地区画として割り当てられた。平安京の祖型をなす平城京の復原模型をみれば、1戸あたり約70坪の敷地にせいぜい10坪程度の板葺きの家が立ち、あとは家庭菜園が広がるような状態であったから、都といえども町屋がすきまなく立ち並んでいたとは想定しにくい【図2】。

ところがこの分割法では、一街区あたり $8 \times 4 = 32$ 区画のうち、直接街路に面するのは外側の20区画のみであり、残り12区画は道路に面しないことになる。もちろん人が出入りするための通路は確保されていたが、道路に面しない家は明らかに商店に不向きである。平安初期の街区は大部分が「公務員住宅」であり、商業活動は東西の「市」に限定されていたから影響はなかったが、しだいに土地の私有化と売買が進むと、家々は競って街路に正面を向けるようになり、その結果として、狭い間口と極端に長い奥行きを持ついわゆる「うなぎの寝床」が出現する。この状態を「四面町」と呼ぶ【図3】。

共同体としての「町」の単位も変質した。「四行八門」の「町」は、街路によって遮断される宅地区画を意味したが、中世京都の「町」は逆に、街路を挟んで両側が一つの商店会としての利害を共有するような、街路を媒介とした結合に変わっていった。これを「両側



町」と呼ぶ。両側町の原初的な形態は、市場町や宿場町のような細長い単列街村にもみられるが、中世京都においてもっとも商業活動がさかんであった四条室町周辺では、一つの街区が四方の通りに面してそれぞれ両側町を形成する「四面両側町」が卓越している。祇園祭に「山」・「鉦」を出す経済力を持った「町衆」が集う「下京町組」地区である。ここで家々の正面が南北・東西に向く比率は、百分法では 50 : 50 となる。どちらがタテかヨコかという区別はない【図 4】。

しかし四面両側町にも限界はあった。いかに「うなぎの寝床」が細長くて、一辺 120m の中央まで伸ばすと奥行き 60m になる。こんな家屋は現実にはありえない。したがって、正方形の中央部には何も建たない空き地が残る。家々は街路に正面を向けているから、この空き地はどの家からみても「裏」にあたる。日本人の近所づきあいは「向こう三軒両隣」といわれるように、道路を共有する者どうしのコミュニケーションが基本であり、自宅の裏の家とは距離を保つのが良策である。表はきれいに掃き清めても、裏には洗濯物が干してあったりして生活の様子が丸見えになるが、見て見ぬふりをするのが礼儀である。

この空き地を、秀吉はもったいないと考えた。「下京町組」から外れた縁部部の市街地再開発にあたっては、正方形街区の中央に南北街路をもう 1 本通したのである。これは、その施行年代から「天正地割」と呼ばれている。その結果、新たな街路に沿って家屋が並ぶ「町」も形成された。現在、京都一の繁華街で「高島屋」がある四条河原町の角から西へ入った「京極通」は、古代平安京の東端を示す「東京極大路」に因むが、ここからさらに西の「大丸」がある「高倉通」までは半町刻みに交差点があり、渋滞がひどい【図 5】。

2. 近世大坂の正方形街区

秀吉は、大阪城の城下町である船場地区に、空き地を持たない街区を造成した。西の大坂湾から東の大坂城に至る東西方向を町の主軸と割り切り、東西街路にのみ家の正面が向くように設定したのである。これを二面両側町と呼ぶ。東西街路が「町」であるのに対し、南北街路はさびしく板塀が並ぶ、単なる通路としての「筋」であった。日本では、社会や身分の上下を示す垂直方向はタテ、同質的な関係を示す水平方向はヨコである。したがって大阪は東西方向がタテ、南北方向がヨコになる。だから、船場地区の両側を区切る南北方向の堀は「東横堀川」「西横堀川」と呼ばれている。

秀吉の設計によれば、一街区は 40 間×40 間 (72m) の正方形であり、その中央に、排水溝として「背割り下水」を流した。そのため一軒の家の奥行きは 20 間 (36m) となる。家の正面が向くタテ・ヨコの比率は、理論的には 100 : 0 である【図 6】。

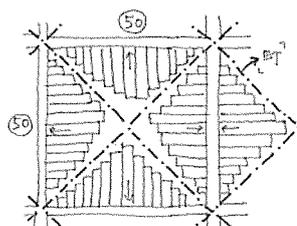


図4 両側町

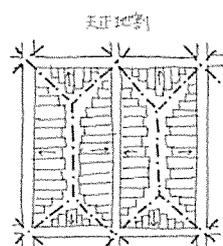


図5 天正地割

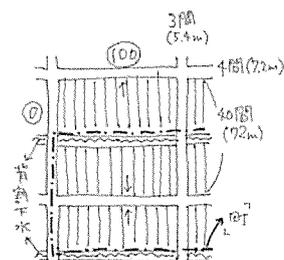


図6 大坂船場

しかし近世以降の大阪には、当初から南北街路に正面を向けた家も多い。船場の南側に「長堀川」を隔てて隣接する「島之内」地区の造成は、道頓堀川の開削と並んで近世以降の事業によるので、大阪城を都市空間の頂点とする秀吉のポリシーは反映されていない。「心斎橋筋」などは南北街路が繁華街となった典型例である。また日本一の規模（延長2.2km、約800店舗）を誇る「天神橋筋商店街」も近世以降の新しい南北街路であるが、いかに商店が立ち並んでも、他の例にならって「筋」と命名されている。

3. 江戸の正方形街区

近世初頭の江戸では、隅田川一帯がまだ「前海」であり、武蔵野台地の東端から「八重洲」と呼ばれる砂州が突き出していた。家康はまず八重洲を造成し、「日本橋」を基準にして町立てと街道整備を始めた。現在の日本橋・京橋・銀座と続く地区である。

設計を任されたのは、初代の京都大工頭でのちに徳川家作事方として仕えた中井正清である。いかなる戦国大名でも、当人を征夷大将軍に任命するのは天皇であるから、自らの政治支配の正統性を皇室の権威を借りて示そうとする。家康は江戸を京都の町に似せたかったが、古代の1丈=10尺という単位は使われなくなっていたので、40丈(120m)のかわりに、近似値として京間(1間=6尺5寸)の60間(0.3×6.5×60=117m)を用いた。

商業活動を優先するなら四面両側町が望ましいが、問題は「裏の空き地」である。そこで妙案というか苦肉の策というか、中井はタテ・ヨコの正面比率を変えた四面両側町を考案した。まず一辺60間を3等分し、両側の2つは街路に面して奥行き20間の宅地とした。さらにまん中の20間幅を垂直に3等分し、街路に面する側はそれぞれ奥行き20間の宅地として、中央に残った20×20間の正方形の空き地を「会所地」としたのである。「町」の単位も画一ではなく、2種類のもものがパズルのように組み合わせられた【図7】。「日本橋」を基点として町を貫通する南北方向をタテとみなすならば、この区分法ではタテ・ヨコの正面比率は60間：20間であるから、百分法に換算すると75：25となる。

4. 名古屋の正方形街区

徳川御三家の城下町名古屋の正方形街区は、あたかも江戸の縮小版のように、一辺50間の四面両側町で設計されている。タテ・ヨコの正面比率はやや複雑である。まず50間を15間・20間・15間に3分してそれぞれの街路に宅地正面を振り分け、中央部分の20間×10間を「会所地」として残したのである【図8】。名古屋では大手から南へ伸びる「本町通」を基準に東海道を直角に曲げているので、これを主軸方向のタテとみなすならば、

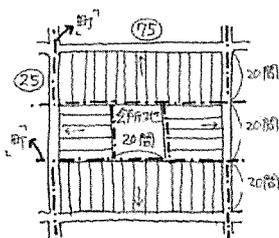


図7 江戸日本橋

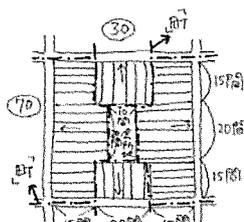


図8 名古屋

タテ：ヨコの正面比率は、50：20 となり、比較のために百分法に換算すれば、近似値ではあるが 70：30 になる。ちなみに名古屋では、この会所地の有効利用として寺院が置かれた地区もある。

5. おわりに

最後にもう一度、両側町のタテ・ヨコ正面比率を百分法で示しておこう。京都=50：50、大阪=100：0、江戸=75：25、名古屋=70：30 となる。ただし大阪のみは二面両側町であり、それ以外は四面両側町である。このことは、それぞれの都市の構造を理解するうえできわめて重要な事実なのだが、そこに何代も住み続けている市民の間でも意外に知られていない。たとえば京都では、四面両側町の「裏」の空き地は、表通りから容易に入りにくいことが逆に利用されて近世には武家屋敷が立ち、明治に廃絶してのちは小・中学校用地に転用された。それでも残った空き地に近年高層マンションが建ち、地元の「町」組織と折り合いが悪いケースが多い。このように、街区の空間構造は今でも住民生活に密接に結びついており、市が計画する「住みよい街づくり」等にも関係するだろう。

そんなことは「とおりすがりの者」にとっては無関係としても、少なくとも路地裏フィールドワークをする際には、このことを頭に入れておくと楽しい。授業ではそう説明している。

〔主な参考文献〕

- ・秋山國三・中村研『京都「町」の研究』法政大学出版局、1975年。
- ・足利健亮『中近世都市の歴史地理』、地人書房、1984年。
- ・高橋康夫ほか編『図集 日本都市史』、東京大学出版会、1993年。
- ・水田義一「近世城下町の正方形街区の系譜」、足利健亮先生追悼論文集編集委員会編『地図と歴史空間』所収、大明堂、2000年。295～302頁。